

夕焼け

池田信雄

村瀬さんは、夕焼けに向かって佇んでいた。夕日の色が強すぎて体の輪郭が赤く滲み、村瀬さんの存在そのものが西の空に吸い込まれて行きそうな危うさに、私はどきどきとした。村瀬さんの命はもうそのようになっていくのだろうか。

私は散歩の途中、休憩室の窓辺に座ってガラス越しに外にいる村瀬さんを見ていた。休憩室は面会に訪れた人たちで先ほどまで満室だったが、今は大型のテレビのまわりに何人かいるだけでがらんとしている。部屋食を嫌う患者たちが間もなくここに集まって夕食をとる。そうすると一斉に雑談が始まり、私は部屋に戻ることになる。私と同室の村瀬さんも部屋に戻っていくだろう。それまでの束の間、一時を村瀬さんは外に出て初冬の夕焼けを眺めている。休憩室から外に出るガラス戸は施錠されている。何処からか周り込んだのだろう。職員に見つかれば注意されるかも知れないと思いつながら、先程と違って村瀬さんの背中にふと強い意志のようなものを感じた。夕日に押されながらも背筋はきりりと伸びていた。それは何なのか付き合ひの浅い私には分かるはずもなかったが、その姿から夕日に向かって何か強い視線を送っているのではないかと思えた。

私が村瀬さんと言葉を交わしたのは二日前のことである。四人部屋は二人が窓辺に位置し、二人はトイレと洗面所の壁に向き合うことになる。私たちは外の光が当たらない場所のベッドをあてがわれていた。私は入院直後一日相部屋の窓辺で過ごし、次の日に胃の全摘出の手術をうけた。そして一週間個室に入れられたあと、また相部屋に戻されていた。個室は手術後の患者が順番待ちをしているとのことだった。私が戻ってきた翌日に村瀬さんが再入院してきた。村瀬さんは相部屋のその場所が気に入らなかったのか、廊下の窓辺の椅子に腰をかけている時が多かった。私は鳩尾からへそ下に切った縫い目が重たくて立ち歩きが思うようにできなかった。それに腹水を抜いていた両脇の穴に、いつまでも痛みが残っていて、運動として勧められている散歩以外はほとんどベッドから離れることはなかった。それでもカーテンを開けて外に出る村瀬さんの心配が感じられたし、散歩やトイレに立ったとき廊下に座って新聞を読んでいる村瀬さんをよく見かけていた。

二日前の朝だった。村瀬さんの奥さんが胸飾りをいっぱい付けてやってくると、すぐさま手術の話をした。喉を切開し、直接流動食を胃に送る手術をしたいがどうするか決めておいてくださいと、医者から問われていた。

「喉の手術をすると、ドロドロのミルクみたいな物をいれるらしいよ。本人はつらくて苦しいんだって。そんな苦しい思いをしてまで、あんたも生きていたくないでしょう」

いつもは、ふんそうだね、とか、ふん分かった、などと穏やかな短い返事を返していたのに、村瀬さんの返事は聞こえてこない。誤飲誤食は、食べ物を飲み込んだとき、胃のほうに行かずに一部が肺に流れ込んでしまう症状のことである。そのために菌が肺に入り肺炎をおこすという。村瀬さんの再入院も軽い肺炎のためだった。抗がん剤の投与で抵抗力が衰えたがん患者の多くは、がんそのものでなく、肺炎をおこして亡くなることが多いという。

沈黙に耐えられず、奥さんの苛立った声が村瀬さんを覆いかぶさるように続いた。

「私もこの年まで生きてきて、そんな手術をしたくないよ。お互いに六十まで生きられへんと思っていたのに、ここまで生きることが出来てほんまによかったやないの。私も糖尿病やから、いつまでもつか分からへんし」

村瀬さんはやはり何も返事をしない。病室には三人の患者がいる。しかし病室は誰もいないかのようにしんとして不気味な程だ。奥さんの声だけが壁に響いてがん患者の三人にも詰め寄ってくる。

「私の友達の旦那さん、胃がんの手術をしてから八か月で亡くなったでしょう。こちらはそんなことなかったものね」

「今の状態やったらいつまでも生きて欲しいけど、そうでないんやったら考えるわね。分かった？ 分かった？」

やはり村瀬さんは返事をしない。

「きのうの晩、睡眠薬のんだの？ 病院だけやよ。頭がぼけてくるから家に帰ったら睡眠薬あかんよ。分かっている？」

「うん、分かっている」

今度はいつもの会話らしく、村瀬さんは普段どおり返事を返していた。

奥さんは言うだけ言って、じゃあ帰るわね、と急ぎ足で部屋を出て行った。奥さんは毎日くるが、すぐに帰っていく。何かの商売をしているのかも知れなかった。腹に思いを溜める人でなく、案外率直で人のいい奥さんかもしれないと思った。そうであってほしかった。私もいつか同じように咽喉の切開手術をするように言われるかもしれない。その時私の妻は何と云うのだろうか。

部屋はトイレに立つ者もいなくていつまでも静かだった。そして突然本でテーブルを叩くピシヤリという音が響いた。大きな感情を込めた音だった。そして村瀬さんの息を整える気配がしたが、それきりまた静寂が部屋に戻ってきた。いつも出入りする女性のスタツフたちも、姿をみせなかった。同部屋の誰もが息を潜ませ、静けさの奥にあるものを噛みしめていた。

午後の散歩の帰り、廊下の椅子に座り新聞を畳んでぼんやりとしていた村瀬さんに思い切って声をかけた。村瀬さんの雰囲気や家族と話す声の柔らかさから、話かけても許されるという気分があった。

「ちよつと漏れ聞こえてしまったのですが、私も昭和十七年生れなんです」

村瀬さんは少し驚いたようだったが、すぐに柔和な顔になり、

「そうですか。十七年ですから戦争中の生まれですね。私が生まれたときには父親は戦地でもうなくなっていました」

と自然な会話を返してくれた。以前、書類を書いている夫婦が生年月日を確認しているのがカーテン越しに聞こえてきたのだった。

しかし私たちの会話は差しさわりのない話題が見つからず、互いに黙って座っていた。それでも何かしら気持ちの交流が感じられた。私たちは共にがん患者だった。村瀬さんは食道がんで、私は胃がんだった。

看護婦さんが通りすがりに、あらっ、お友達になられたのですか、と声をかけて微笑んでくれた。先ほどの短い会話を遠くで見ているようだった。妙に照れくさくなり、私たちは席をたつてそれぞれのベッドに戻った。この病院では看護婦の名札を胸にさしている。何故看護師とは言わないのだと不思議に思ったが尋ねてみる機会がなかった。村瀬さんがカーテンを開けたとき、ベッドに司馬遼太郎の本が無造作に置かれているのが見えた。あの本だと思った。朝あの本で村瀬さんは食事用のテーブルを叩きつけたのだ。

夕焼けに顔を向けた村瀬さんの後ろ姿を見つめていると、いま何を思っているか肌寒くなった十一月の空気に身をさらしているのだろうかと考えた。やはり奥さんが手術の拒否を勧めていることに踏み切れないのではないだろうか。村瀬さんは手術をして延命策をとりたいたいかもしれない。しかしそれには奥さんの介添えが必要になる。奥さんにできないと言われたらどうにも仕方がない。奥さんに従わなければ他に方法はない。

村瀬さんは突然握りしめた片手を口にあて、残りの片手を腹のあたりで左右に振りだした。軽い肺炎だというものの、そんなことをして夕方の風に身をまかせるのは良くないと思った。私は手術後の重い足取りだったが、外に出ることにした。休憩室を出て廊下を迂回し、看護婦さんの目を逸らしながらやっと外への出口をみつけた。ドアを開けると風は弱かったが、がん病棟の十二階は空中に突き出し、ひんやりとした大気が吹きこんできた。私は少し怯んだが村瀬さんがやはり気になった。一歩足を前にだし、体重を二歩目にかけて。身体がスムーズに前にでた。よかった。これなら村瀬さんのところに行くことができる。私は植木につかまり、窓のサッシに寄りかかりながらやっと村瀬さんの横に立つことができた。村瀬さんには手の動きを止める気配はなかった。かける言葉が浮かばずただ横に立っているだけだったが、耳をすますと、村瀬さんの口から小声で「ちんちんどんちんちんどん」というお囃子が流れているのに気がついた。しばらくして、村瀬さんの手の動きの意味が分かった。ちんちん屋だった。片手でクラリネットを吹き、もう片手でチンドン太鼓を叩いているのだ。チンドン屋といえばプラカードを持った人が先頭に立ち、

管楽器を吹く楽師が続き、そしてゴロスと呼ばれる大太鼓をもった人やビラをまく人がそのうしろを練り歩く。定番曲は「美しき天然」だった。「空にさえざる鳥の声……」の出しは人の心を躍らせるメロディーだが、どこか哀愁に満ちている。この曲はサーカスでも定番だった。いまあのメロディーが村瀬さんの頭をぐるぐる回っているに違いなかった。「チンドン屋ですか」

私は思い切って声をかけた。村瀬さんは顔を和ませ微笑んだ。

「私、昔チンドン屋をしていましたね」

一言だけの会話を交わしてまた二人は夕日に目をむけた。夕日はビルの谷間に大きな赤い玉となって沈もうとしていた。病院のある台地は大阪が海だったころ半島として湾に突き出していたところで、昔から夕日を見る高台の場所として名高い所だった。地名にも残っていて、この辺りは夕陽が丘と呼ばれている。

私は幼い頃チンドン屋の後をついて、隣村まで行って迷子になったことがあった。夕日の中だった。たまたま通りがかった近所の人に連れられて夕暮れの家に戻ると、父親にひどく叱られたのを思い出した。村瀬さんは生れたときすでに父親は戦死していたという。父親のいない少年時代をどう過ごしたのだろうか。やはり同じように父親が戦死した小学生の同級生がいた。図画の時間に父親を描くことがあった。なにげないその時間に彼は大きな犬の絵を描いた。先生は怒りをあらわにし、同級生を殴った。彼は泣きながら必死になって言い返した。

「だってこの犬はオスだもん」

風が吹いてきた。夕日の辺りから湧き出した風はかすかに海の匂いがした。ビルの町並みの向こうは大阪湾である。ベイブリッジと光っているはずの海は明るすぎて、しかとは見えない。しかし村瀬さんの目はその辺りではなく、真っ赤な広々とした空を見ていた。

一羽の鳥がそこを横切っていた。村瀬さんは鳥の自由さを感じている。私は直感的にそう思った。それは私の思いでもあった。これからはがん患者として制約され制約され生きていかななくてはならない。

「部屋に戻りましょうか」

声をかけると、村瀬さんはうなずいた。もうたっぷりと夕日を見た満足げな表情をしていた。室内に戻るわずかな時間に辺りは急速に暗くなっていった。つる植物が私の足をすくって私は植栽の木に倒れかかった。村瀬さんが私の肩を支えてくれた。細い腕だったが、労働者のがっしりした力強い腕だった。チンドン屋がすたれた後、村瀬さんはどんな仕事についていたのだろうか。部屋に帰ると夕食が届いていた。私たちはカーテンを引き、それぞれの夕食を摂った。私の夕食は初めて全粥と卵豆腐と香の効いたかつおでんぶだった。グレードが一つあがったのだと嬉しかった。手術後の体調は確実に元に戻ろうとしていた。夕食が済んだ頃に担当医がやってきた。明日か明後日に退院してもいいと言った。「以前ならもつと入院していましたしたが、今は動いた方がいいという考えで、二週間で退院となっています」と、説明があった。医者が帰った後妻に電話をした。妻は早くからそのこと

を聞いていたので、退院の運びを考えていた。村瀬さんがカーテン越しに「二週間以上だと病院は儲からないシステムになっているんだよ」と、声をかけてくれた。

その夜遅く五人の身内が村瀬さんの病室に入っていった。息子夫婦と子供二人そして奥さんだった。カーテンの隙間からその順に村瀬さんのカーテンをくぐるのが見えた。背広姿の息子は背が高く眼鏡をかけ、その奥さんは地味なセーターを着ていた。二人の子供は女の子でお揃いに髪を結いあげていた。すぐに会話が聞こえてきた。まづ最初に女の子が「おじいちゃん大丈夫？」と声をかけ、村瀬さんの応答があつてそれから長男の奥さんの安否を問う声があった。そして村瀬さんの奥さんが息子の名前を言つて、

「今日はわざわざ東京から来てくれたのよ」

と前置きをし、

「お父さんに話をしてよ」

と息子に話を振り向けた。私は息を飲んだ。話はすでにできていると思つた。奥さんは自分一人では村瀬さんを納得させることが出来ない、息子に応援を頼んだのではないだろう。村瀬さんもそう思つて、今息子の目を見ているのかもしれない。どんな気持ちで息子の言葉を待っているのか、慮るのはつらかつた。

「仕方がないよ、お父さん」

その後は声が急に小さくなつて言葉としては聞こえなくなつた。ただ何かを説得している気配だけが伝わってきた。私は休憩室にでも行きたかつたが、それもできずにベッドに横になりながら電気を消した。そんな行動は息子たちに何の影響も与えないことは分かつていたが、私に出来ることはそれしかなかった。私は目をつむり、夕焼けを思い出した。身体だけは病室にあつても、いま村瀬さんの本当の心はあの夕焼けの中にあつて、赤く染まつているのではないか。そしてチンチンドンというリズムが村瀬さんの身体全体に鳴り響いているのではないか。そうに違いないと思つて私は目をつむり続けた。

「お父さん、返事をしてよ」

奥さんの苛立つ声が突然聞こえてきた。そしてその後病室は急にしんと静かになつた。

誰もが息を潜ませていた。しばらくして村瀬さんの家族は黙つて帰つていった。

その日の夜遅くなつて、私は妙に寝付かれず、しばしばトイレに起き上つた。あの時の静寂はいつまでも部屋中に余韻を残していた。廊下の椅子に腰かけたり、休憩室まで行つてみたりしてみたが、何かが私の身体の中でうごめいていた。やがてそれが一つの形になつて私に襲いかかつてきた。村瀬さんのことではなく、彼に影響された自分自身の先行きのことだった。医者から勧められた「胃がん治療 ガイドラインの解説」をベッドの上で座つて読み直してみた。私の場合、ステージはⅡだった。六段階の三番目だった。ステージⅡだと五年生存率は六八・三%である。胃がんは、再発すると五〇%の人が一年以内に死亡する。手術の時はわからないが、全身にがん細胞が飛び火していると、それが手術後にあちらこちらに再発する。胃がんの再発はもう手術はできない。妻は再三そんな数字などあてにできない。実際に長生きしている人がたくさんいる。私はそれを信じている、と

言う。そうかもしれない。しかし長生きは統計上三%以内の人に限られる。色んなことが頭をよぎる。幼い子供を抱えて死んでいく若い父親や母親のがん患者に比べると、私の場合、子供はすでに独立して一人前になっている。現金はたいしてありもしないが、借金もない。心残りがあるとすれば、妻が独り暮らしになるということだけである。三%のなかになんとか入りこめないだろうか。

電気を消し仰向けになって目を閉じた。がんになったために死ぬのではない、人は死ぬものであるから死ぬにすぎない、と言ったのは誰だったのだろうか。その言葉はとりあえず私の不安を鎮めてくれる。そのような言葉はほかにもある。それらを思い出してみる。静かに目を塞いでいると、私は死を自然なものとして受け入れることができそうな気がしてくる。それはあきらめではない。自然の摂理に従うということである。私はいつしか眠り入っていた。

翌朝妻がやってきた。退院は今日の午後と決まっていた。妻は私の身の回りの荷物を整理していたが、院内の売店に行ってくると言ってエレベーターで下に降りて行った。私は村瀬さんの顔を見たいと思っていた。やっとカーテンから村瀬さんが現れたのはそんな時だった。村瀬さんはいつもの穏やかな顔をしていた。

「今日の午後に退院します」
そう言うのと村瀬さんは黙ってうなずいて、微笑んでくれた。そしてふらふらと部屋をでていった。柔和な顔ではあったが、どこか元氣のない様子に、昨夜の村瀬さんの息子の言葉が蘇ってきた。

「仕方がないよ、お父さん」
言葉づかいは丁寧だったが、反発しづらい押しつける響きがあった。妻の側にたつて説得をする我が子の言葉をどう思っているのだろうか。村瀬さんはなぜ返事をせずに沈黙し続けているのだろうか。やはり余命を伸ばすという手術を見過ごすことができなのだろうか。私には尋ねてみたいことが一杯あったが、立ち入ったことを聞くだけの繋がりはまだなかった。私は重い気持ちになって、窓からの光も射さないベッドに寝ていた。天井のしみが幾何模様になったり人の顔になったり、ただのしみ跡になったりしていた。遠くで工事現場の音が聞こえていた。

突然カーテンが開いて村瀬さんの顔が私にむけられた。驚いて身体を起こすと、村瀬さんは片方の手で太鼓を打ち、もう片方の手でクラリネットを吹く真似をしてみた。小刻みで前に進んだり後ろに戻ったり、夕焼けの時の再現だった。

「ちんちんどん、ちんちんどん」
私は思わずリズムをとった。すると村瀬さんは顔面いっぱい笑顔になって、ますます太鼓を打つ手の動きを大きくし、クラリネットを吹く手を高く上げた。「そおらにいさえーずる」とおりのこえ……」のメロディーが部屋中に鳴り響いてきた。村瀬さんの現役時代の姿が目にかんだ。ちよんまげの鬘を冠り、白く塗りとくった顔に赤い口紅と濃い睫毛、そして尻をからげた着物に白足袋と草履と腰に差した二本の刀。私が少年時代にみた

ちんどん屋の衣装だった。同じような衣装を着て村瀬さんは街中を練り歩いたことだろう。それは村瀬さんの一番華やかな時代だったにちがいない。そしていまその頃を思い出して取って置き、笑顔を見せてくれている。

しばらくして村瀬さんは片手を一寸あげ、自分のベッドに帰って行った。病室はすぐに静かになった。誰かが窓を開けていたのか突風が吹き込み、それぞれのベッドのカーテンを激しく揺らした。

妻が戻ってくると、すぐに昼食が配られてきた。粥に玉子豆腐としゃけのほぐし身がそえられていた。妻は買ってきたおにぎりを食べた。

二時頃を予定していたが、食事を済ますと何もすることがなく、予定を早めることにした。村瀬さんに声をかけようとしたが、カーテンの中から寝息が聞こえてきたのでそのまま病室を出た。すれ違った看護婦がよかつたねと声をかけてくれた。

エレベーターの前まで来ると退院に実感が湧いてきて、村瀬さんに挨拶できなかったことが悔やまれた。そうか、ちんどん屋の真似ごとは私への退院祝いだったのだと、ふと気がついた。すると連鎖するように、村瀬さんの本当の思いが伝わってきたように思った。結局は喉の手術はしないことになるかと覚悟をしていたが、村瀬さんの思いは、手術するかどうかを自分の意思で決めたかったのだ。人の指示でなく、人生の大事なことは干渉されず静かに自分で選択したかったのだ。夕焼けに向かって佇んでいたあの時、訴える相手のいない村瀬さんはそのメッセージを大空に送り続けていたのではないだろうか。そして本でテーブルを叩いた鋭い音も、そのことを訴えていたのに違いない。

エレベーターに乗った。ドアが閉じられると急速に十二階のがん病棟から遠ざかっていった。